

3.5 明治29年（1896）松本市街地・上浅間温泉の土砂災害

○松本市街地の土砂災害

図3.8は、明治29年（1896）と昭和34年（1959）の土砂洪水による被災地区の地名と流下範囲を示しています。明治29年（1896）7月の水害は、3.4項で説明した寛保二年（1742）の「戌の満水」に次ぐ水害でした。7月初めより雨が降り続き、20日夜前よりは特に大雨盆を覆す如く降り続き、諸河川は満水となりました。翌21日降雨激しくなり、昼頃女鳥羽川が水汲付近で決壊し、安原町・和泉町・下横田町・餌差町を洪水が襲い、続いて東町・出居番町を襲い、片端の堀に押し入りました。堀と周辺の道路は一面の海となりました。特に出居番町より上土町は本瀬となり、縄手辺で元の女鳥羽川に乱入しました。

また、片端の堀より堀伝いに北馬場・西堀・今町を浸襲しました。この有様のため、人家は大抵床上浸水し、惨状は目も当てられない有様でした（写真3.7）。この時、大門沢川も氾濫しました。

女鳥羽川の氾濫と相前後して、薄川が筑摩神社付近の左右両岸で決壊し、左岸側の洪水は筑摩神社とその周辺の集落を襲い、西方田圃を伝って新家町を襲いました。右岸側の洪水は埋橋・源池を襲い、中町の横町辺にて女鳥羽川に合流しました。他方は長澤川と合流して本町五丁目を襲い、川南の街路を浸し、本町・中町を流れて女鳥羽川に合流しました。洪水流によって、開智学校（松本市中央1丁目）の門と校舎の一部は大破しました（写真3.8）。

翌22日午後雨が減少し、23日雨全く止み、水量が減退して、市民漸く安堵の思いとなりました。

この洪水にて、市中の諸橋梁のほとんどが流落しましたが、千歳橋（旧大手橋）と緑橋は石築堅固なため、落橋せず南北往来が続けられました。

この水害の被害状況は以下のようなものでした。

○家屋流失崩潰 121軒

○同破損及浸水 5091軒

○流亡土地反別 182町

○宅地村外 127町余

○堤防切所 753間

○堤防決壊 2915間

○道路毀損 5740間

○橋梁毀損 58ヶ所

○橋梁流失 76ヶ所

○総損害金 25万9900円余

写真3.7と写真3.8は、松本市立博物館所蔵の明治29年災害の被災状況写真です。



写真3.7 明治29年災害の被災状況写真
松本町北深志東町（松本市立博物館蔵）



写真3.8 明治29年災害の被災状況写真
開智学校の破損状況（松本市立博物館蔵）

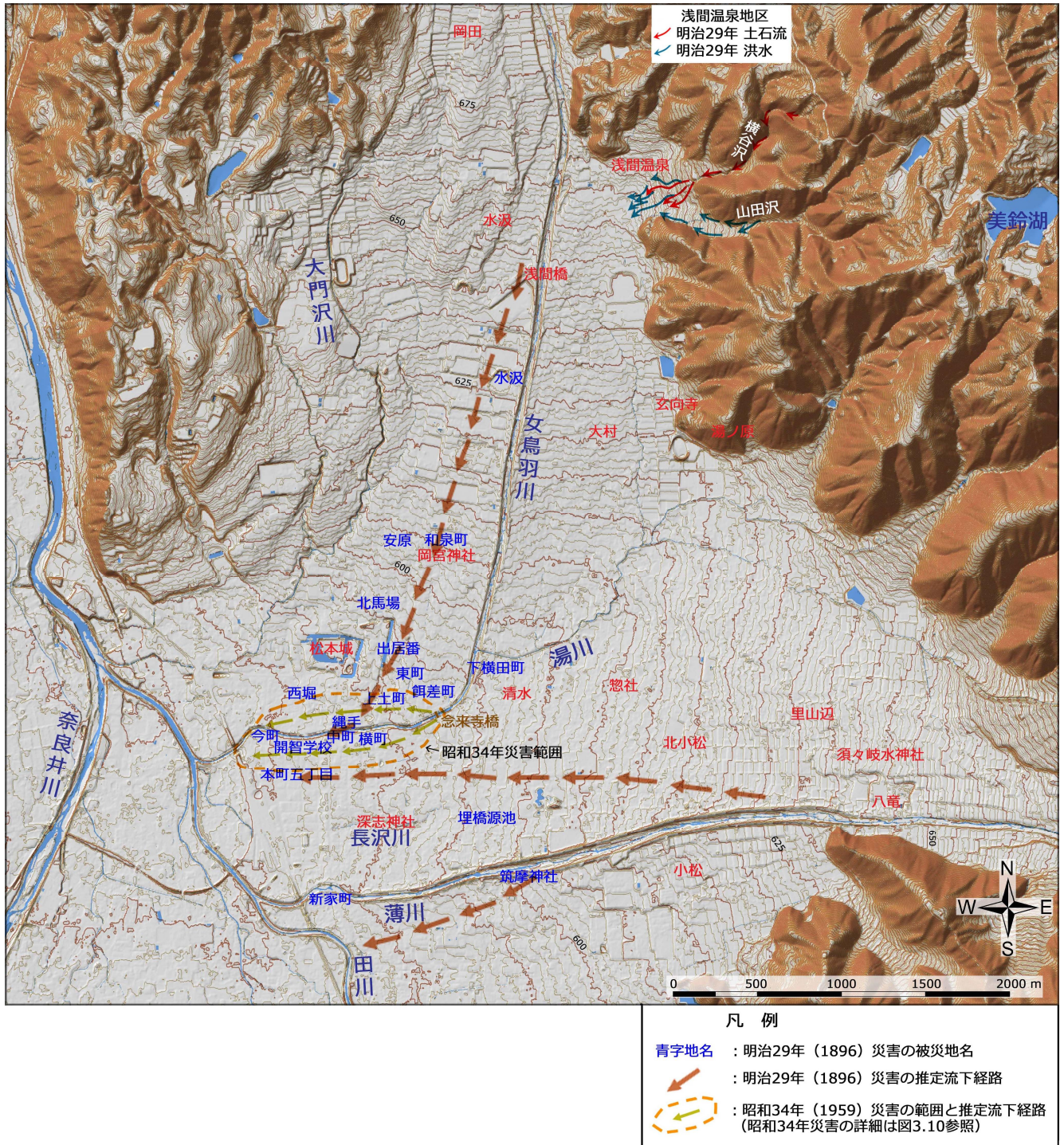


図 3.8 明治 29 年(1896)と昭和 34 年(1959)の土砂洪水による被災地区の地名(青色)と流下経路(3.5 項と 3.7 項に記載された地名をもとに推定)
 地理院地図「陰影起伏図」, 国土地理院基盤地図情報をもとに作成

図 3.7 は、明治 29 年（1896）の浅間温泉付近の大水害見取図を地理院地図（傾斜量図）に重ねたものです（本郷村誌編纂会（1956）などをもとに作成）。土砂・洪水災害と地形との関係が良くわかります。凡例に示したように、土砂石押し（赤線）と水押し（青線）に分けました。土砂石押し（土石流）は、主に横谷沢から流出しました（本郷村誌編纂会，1983）。

図 3.9 は、本郷村誌編纂会（1956）『本郷村誌資料，第二集ノ二，浅間温泉編，下』に掲載されている「明治 29 年（1896）上浅間大水害見取図山本家史料」で、被災した旅館名などが読み取れます。

明治 29 年申（1896）7 月初めより、晴れ間なく霖雨が続きました。20 日夜より特に大雨が降り続き、諸川満水となりました。翌 21 日夜明けまで降雨甚だしく、その後少し晴れ、午前 9 時頃横谷沢の高山（現在の大正山，標高 1061.3m）西側の斜面が崩れ、土砂が押し出しました。横谷沢の不動沢の所より崩れ、湯坂が本瀬となり、土砂と共に家屋が流失、浸水しました。

同日 10 時頃山田沢の地獄谷の岸、すずが洞山角、七堂登り道向い山斜面、大音寺山斜面の山椒山が崩れ、一時に押し出し、家屋流失、目の湯辺にて切れ、本通りは本瀬となりました。

この水害の被害は次の如しと書かれています。

1. 死亡者、1 名

2. 押し流れし人別、1 名

3. 浸水土砂入家屋

仙気の湯 床上 3 尺（90cm）浸水

もみじの湯 2 階下まで水入り

尾上の湯 水押し

菅の湯并柳の湯 土砂入

倉下芳の湯 土砂入

富士の湯 土砂少し入

梅の湯 土砂入多く

栄の湯 土砂入多し

ママベヤ 浸水

ひなの湯 一部浸水

鳴湯 浸水并土砂入多し

4. 家屋流失破損等

松の湯 半流れ土砂入多し

千年屋 残らずつぶれ流失

床清 半つぶれ流失

小柳 本宅半分流失并湯舎裏 2 階建全部流失

5. 其の他屋敷地浸水、×15 軒

昼時分になり宮の沢から押し出し、浅間学校に被害がありました。この際当地は蚕種の季節のため、諸国より蚕種商人が入込み、繁盛していました。浅間宿が大洪水に付一時白米 1 升 11 銭位のところ俄かに値段が上り、1 升到付 17～20 銭になりました。その後の炎暑の季節となり、非常の困難になりました。この時止宿した蚕種商人が相集まり、義捐金 20 円余りを贈りました。なおまた、旧松本知藩事（戸田子爵）は金 30 円を見舞として贈られました。翌 8 月 13 日に長野県知事高崎氏が出張して、被災状況を見分しました。



写真 3.9 現在の山田沢、横谷沢，2024 年撮影

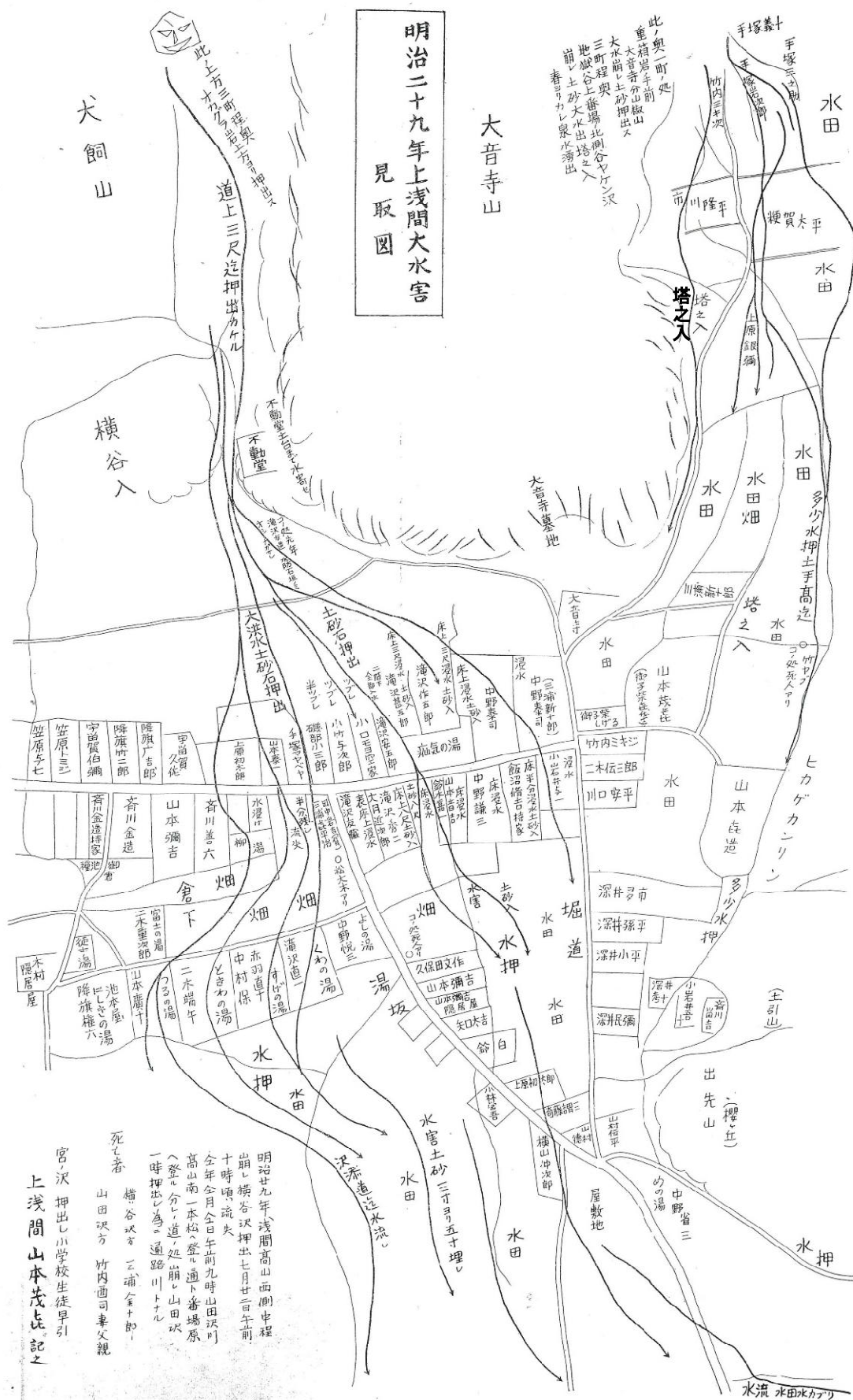


図 3.9 明治 29 年（1896）上浅間大水害見取図 山本家史料（本郷村誌編纂会，1956 に加筆）

○女鳥羽川の氾濫と開智学校の歴史

重要文化財旧開智学校資料刊行会（1988）によれば、開智学校は明治 6 年（1873）5 月 6 日、筑摩県学を改め、学制による小学校として、廃仏毀釈で廃寺となった全久院跡地に竣工しました。この校舎は昭和 38 年（1963）3 月まで 90 年間近くも使用されました。昭和 36 年（1961）に重要文化財に指定されていた校舎は、令和元年（2019）に近代学校建築として初めて国宝に指定されました。

明治 25 年（1892）のシカゴ万国博覧会に校舎の写真（写真 3.10）が出品されるなど、当時から日本を代表する学校建築として評価を受けてきました。その後、校舎は女鳥羽川などの氾濫で、何度も被害を受けています。特に写真 3.8 に示したように、明治 29 年（1896）の水害では、激甚な被害を受けました。これらの被害を受けたものの、すぐに修復され、児童や教員は地域の人達に大切に守られ続けました。

長い間、松本の学びを支え市民に愛されてきた校舎ですが、昭和 34 年（1959）8 月 14 日の台風による水害を受けました。この水害をきっかけに校舎の保護のため、新校舎を建設して文化財指定を受けた校舎を移築復元することが決まりました。写真 3.11 に示したように、校舎は竣工からずっと市街地の中央を流れる女鳥羽川のほとりにありましたが、河川の拡幅工事のため、昭和 38 年（1963）1 月から翌年 8 月にかけて、現在地（松本市開智 2 丁目）に移築されました。

昭和 40 年（1965）4 月、旧校舎は文化財校舎の価値と松本の教育のあゆみを伝える教育博物館に生まれ変わりました。文化財校舎の公開と明治時代から脈々と受け継がれてきた歴代の教育資料 3 万点（現在は 11 万点）を展示する博物館として、現在まで活動を続けています。



写真 3.10 擬洋風校舎竣工当時の開智学校
国宝旧開智学校校舎蔵



写真 3.11 女鳥羽川沿いにあった開智学校
国宝旧開智学校校舎蔵



写真 3.12 移築された開智学校、2025 年撮影
（写真 3.8 と同じ方向から撮影）